様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２８３９

研究課題名（和文）シティズンシップ教育を基盤とした英語教育再編のための「対話的」英語スピーチ活動

研究課題名（英文）"Dialogical" English Speech Activities that Aim at Restructuring English Language Education based on Citizenship Education

研究代表者
吉武　正樹（Yoshitake, Masaki）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：４０３７２７３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：多様な価値観や信念が混在するグローバル化社会では、協働して包摂的な社会を創出すべく個の価値観を表現し共有し合うことが不可欠である。一方向の情報伝達になりがちな英語スピーチ活動を「対話的」にすることにより、こうした「市民」を育成することが鍵となる。特に、「話す聴衆」の育成を重視し、話し手に相手意識を持たせ、「話す聴衆」をよき話し手に転化させることにより、スピーチを対話に近づいていくことが可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会の価値観が多様化している一方、日本社会は依然として文化的同質性をベースとした閉塞的な社会観を保持し、自律した個を起ち上げることができないでいる。コミュニケーション能力を育成するための英語教育も、その考察の枠組み自体が道具的な言語観・コミュニケーション観に影響され、言語、自己、文化、社会、コミュニケーションの本質を捉え損ねている。
本研究は、コミュニケーション学の知見から、シティズンシップ教育を基盤にした英語教育再編を試みた。特に、日本語とは異なる文化的背景を持つ英語の指導法を対話的にすることにより、市民性の形成に寄与することが可能であることを示したことに、本研究の社会的・学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In today's globalized society, where various values and beliefs coexist, it is inevitable that people express and share their values to create the public sphere and an inclusive society collaboratively. English speech activities tend to be regarded as mere one-way flow of information. Nevertheless, it is significant to bring about above-mentioned "citizens" by rendering English speech activities "dialogical." Especially, emphasizing the importance of training "audiences who speak" will make speakers pay close attention to audiences. Furthermore, it will enable "audiences who speak" to transform themselves into ideal speakers so that speech activities will become a more dialogical process.

研究分野：コミュニケーション学

キーワード：英語スピーチ活動　対話　シティズンシップ教育　公共圏の創出　市民性形成　話す聴衆（オーディエンス教育）　多様性　自由の相互承認

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

多様な価値観や信念が混在する今日の雑多なグローバル化社会では､巧みな言語使用を超え、自己、他者、社会、文化が相互に作用しながら積極的に高め合うコミュニケーションが求められている。つまり、異質な他者へと心身を開く構え、自他の考えを交換し客観的・批判的に検証し合う術、他者と協働して社会を築く行動力などが不可欠である。英語教育では言語の「道具」的側面が強調されがちだが、そこで欠けているのは、１）言語やコミュニケーションの本質的理解、２）外国語を個人の能力に矮小せず「公」の観点から捉えなおす枠組み、３)「他者との対話」や「社会の構築」の視点から外国語習得を支援する指導法である。

２．研究の目的

本研究では、他者とのコミュニケーションによって「公」としての社会を主体的に構築する「市民」を育成する「シティズンシップ教育」の枠組みにおいて、(１）コミュニケーションや言語、アイデンティティ、社会、文化などの本質的な理解をもとにした英語教育の再編を模索する。特に、(２）実践の鍵として「英語スピーチ活動」に焦点を当て、スピーチを他者との「対話」と捉えなおし、「市民」に必要な英語コミュニケーション能力を高める指導法を研究する。

（１）コミュニケーション学とシティズンシップ教育からみた英語教育の課題

①コミュニケーション学によるコミュニケーションと言語の包括的理解

コミュニケーション学が教えるように、言語と認識は複雑に絡み合い、文化的特徴は言語に反映され、コミュニケーションを介して文化や行動規範が再生産される。英語という外国語を学ぶことは、こうした別世界を自分の中に創り上げることである。機械的な世界観によって、コミュニケーションや言語の本質的な理解が妨げられがちな今日、英語教育が目指すコミュニケーション能力をより包括的・本質的に理解する枠組みをコミュニケーション学の視点から構築する。

②シティズンシップ教育における「市民」･「公」の視点の導入

日本では所属する内集団（例：家、母校、国家）を自己の上位に位置づける傾向があるため、社会を「新たに」創り上げるという視点が脆弱である。シティズンシップ教育において社会とは、他者とのコミュニケーションによって開かれる「公的領域」という関係性の束のことである｡特に外国語は文化的他者とのコミュニケーションを通して新たな関係性を築く役割をもち、その意味でコミュニケーション能力とは、他者との「対話」を根底にした「異文化コミュニケーション能力」というべきものである。

包摂的な社会を創出する自立的・自律的な「市民」であるためには、外集団の認識を相手の視点から理解し、内集団の認識を相対化する能力、すなわち批判的に物事を考察できる批判的コミュニケーション能力が必要である。本研究では、批判的教育やそれを英語教育へ応用した研究、批判的コミュニケーション教育との接続も視野に入れつつ、シティズンシップ教育にもとづき市民の育成としての英語教育の編成を模索する。

（２)「対話」としての英語スピーチ活動の理論化と指導法

スピーチ活動は書くことや話すことへの応用として授業で用いられるが、多くの場合、最終段階での「発表」に終始している。ここではスピーチが話し手から聴き手への一方的な情報伝達として捉えられがちであり、コミュニカティブな活動には至っていない。しかし、スピーチとは本来相手あっての言語行為であり、構想を聴衆に向かい合う前の準備段階からすでに他者を志向していなければならない。また、スピーチは聴き手にとっても能動的な行為であり、話し手の意見を自分なりに評価し、自身の考えを深化する機会となる。

本研究では、英語スピーチ活動を両者の「対話」と捉えなおし、シティズンシップ教育を基盤とした英語教育の実践法と位置づける。そのために、英語スピーチ活動を利用した、「市民」に必要な英語コミュニケーション能力を高める具体的指導法の開発を目指す。

３．研究の方法

シティズンシップ教育を基盤とした英語教育の再編を目指す本研究の遂行にあたり､「シティズンシップ教育」と「英語教育」を「『対話的』英語スピーチ活動」を媒介として接合すべく、コミュニケーション学および関連領域の文献によって重要概念を整理し、また、教育哲学の専門家である苫野一徳氏（熊本大学）や批判教育学の見地から外国語教育を研究している Graham Crookes 氏（米国ハワイ大学）の協力を得ながら、理論的考察を行った。指導法の開発においては、以上の理論的考察をもとに、自身が担当する英語やスピーチの授業あるいは課外活動において、さまざまな「対話的」英語スピーチ活動を試行した。また、アメリカやオランダにおけるシティズンシップ教育の現場を視察し、理論的考察および指導法開発の参考にした。

４．研究成果

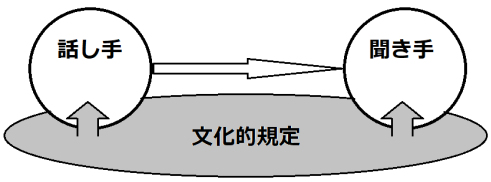
（１）シティズンシップ教育と英語教育の接点としてのコミュニケーション

英語を道具としてコミュニケーションすることは、自動的に市民性形成や「公」の創出へと導くわけではない。シティズンシップ教育にもとづいて英語教育を再編成するためには、コミュニケーション行為とは自身と価値観を共有しない他者と向き合い、自身の考えを根拠づけな

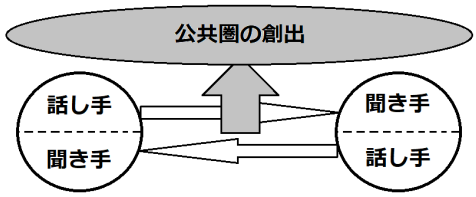
がら、協働して公共圏を創出する試みであるという認識から出発しなければならない。
日本において社会および個人を起ち上げる際、外から隔離された「家」としての社会、その「住人」である個人という見方を内包する傾向にある。「姓-名」の順で自己を呼ぶ行為、一人称・二人称が相手との関係性において変化する言語構造など、知らず知らずのうちにこうした社会・自己観は文化や言語、コミュニケーション行為によって補強されている。メンバーシップは血縁のようにあらかじめ与えられ、固定化されており、そこでは文化的他者を包摂する余地が少ない。
英語は 6000 あまり存在する言語のうちの１つにすぎず、日本語－英語間の対照言語学的な比較は一つの表象にすぎない。しかし、英語は上記のような「日本語」的社会・自己観を補強する作用を相対化しうると考えられる。日本語が内包する価値観と比較すると、英語的価値観では、個人は所属集団や相手との関係性によって変化するというより、自律的に存在するものとして捉えられている。例えば、一人称・二人称は I、you という普遍的な記号に過ぎず、日本語よりも水平な関係性が前提とされている。かつ、他者と隔てられた個として存在するがゆえに、コミュニケーションは「相互理解の不透明性」を前提に発動し、「わかりえない」相手により理解してもらうために根拠づけや表現の工夫などが求められる。ここには、集団を再生産し維持するコミュニケーションというより、新たに生まれる相互理解を介した公的な社会の創出の萌芽が見て取れる。
英語教育において育成が目指されているコミュニケーション能力は、以上のようなシティズンシップ教育の文脈において意義づけることが可能である。

（２）「話す聴衆」を育てるオーディエンス教育を意識した「対話」への展開
「対話的」英語スピーチ活動とは、単に英語を使ってスピーチをし、聞くという一方向に情報を流す活動ではなく、互いが相手意識を持ちつつ、双方向のコミュニケーションを志向するスピーチ活動である。先述のような特徴をもつ日本の文脈では、スピーチは共同体の上下関係を反映し、その維持に動機づけられた儀式的なものになりがちである（何を話すか以上に、誰が話すかが重要であるように）。また、説得のためのスピーチである演説においても、政策の内容を具体的に説明するよりも名前を覚えてもらうために候補者の名前を連呼することを優先する選挙運動、相手に届くように冷静に論点を分析して丁寧に言葉を尽くすよりも、想定する敵に対し感情を吐露する行為となりがちなデモ活動など、「対話」としてのスピーチが醸成しにくい土壌がある。

一方向なコミュニケーションとしてのスピーチ



「対話的」コミュニケーションとしてのスピーチ



英語スピーチ活動を「対話的」にする契機として、「聴く」ことを中心としたオーディエンス教育を重視することが有効である。スピーチ（話すこと）であるがゆえに「話す」練習に重きを置きがちなスピーチ指導であるが、対話的コミュニケーションとして英語スピーチを捉えた場合、話すことと聞くことは必ずしも明確に分けられるものではない。例えば、話し手は相手を抽象的な他者として想定するのではなく、聴衆分析によってどのような価値観をもった他者であるのかを先取りする必要がある。また、スピーチはそのような他者に言葉をいかに届けるか苦心する行為でもある。一方、聴衆はスピーチをする他者の価値観に対し、自身がどのような意見を持つか、自身の価値観が変容するか、それはなぜか、自己を常にモニタリングすることになる。そして、スピーチを終えた後、聴衆を意識した話し手と話し手への意見を共有する聴衆との対話が続いていく。その意味で、スピーチの終わりは、常に対話の継続である。このように、スピーチ準備段階から発表後の質疑応答までの一連の過程が、対話による合意形成と社会の創出の過程と結びつくことになる。
この循環をスピーチ活動に生み出すためには、聴衆の役割が鍵となる。すなわち、スピーチを「拝聴する」聴衆ではなく、自ら発話を志向する聴衆としての「話す聴衆」を育成していくことが重要である。聴衆が話し手の意見を批判的に検証し、声をあげることにより、話し手は自然と相手意識を持ち、相手と向き合い、かかわるという渦に巻き込まれることになる。このような構えを身につけた聴衆は、自らが話し手の立場になる際にはそれを反転させ、「話す聴衆」と向き合えばよいことになる。このように、「話す聴衆」の育成こそ、「対話的」英語スピーチ活動の指導法を開発するうえで中心的な課題となる。

（３）社会との接続を志向したコミュニケーション教育としての英語学習
英語学習におけるコミュニケーションと社会創出のコミュニケーションは、必ずしも乖離したものではなく、「社会」との接続を意識することによって有機的に接合することが可能である。コミュニケーションとは常に文脈の中で行われるという意味で、常に相手や社会とつながって

いる。アメリカで視察した教育の例として、新聞への投稿をライティング活動の上位の目的に設定することにより、社会との接続が書く行為に組み込まれ、よりリアルな行為として意識されていた。確かに何かを書く場合、そこにはつねに読み手が想定されていなければならない。このようにコミュニケーション活動が社会に開かれることにより、英語学習は社会との有機的な接合点を見出すことができる。

一方、マクロな視点からみると、英語学習が教室の中のコミュニケーションにとどまっていては、「対話的」英語スピーチ活動をとおした社会創出のコミュニケーションとその発動は不発に終わるであろう。オランダで視察したオールタナティブ教育現場（例えばイエナプラン）は、その隅々がシティズンシップ教育の実践といえるようなものであったが、それは労働環境、移民政策、保険制度、税制などを含めた、社会的なインフラとの関係を無視して成立するものではない。そこには、社会的インフラが整備されているがゆえにシティズンシップ教育が可能となり、その成果としてインフラが持続・補強されているという相互関係がある。日本においても、社会との接続を志向するにあたり、英語という一教科に限らず、教育と社会の関係をより包括的に捉え、苫野一徳氏が主張するように「自由の相互承認」を基軸に公教育を考えていくことが不可欠である。新学習指導要領で謳われている「主体的・対話的で深い学び」などは、教育課程と社会的なインフラとの接続の可能性を示しており、その意味で今回の改訂は一つの転機となりうると考えられる。

（４）多様性の発見とポジショナリティへの意識

個が集団に埋没する社会においては、個は集団のアイデンティティによって同質化され、異質性は内なる集団を隔てる境界線の外部に見いだされる。しかし、スピーチをより「対話的」な行為へと変容させるためには、同質的だと考えられていた内集団の中にこそ異質性を見出さなければならない。つまり、一見同じ「〇〇」（例：日本人）と見なされていたクラス集団が、実は多様な価値観を持つ「他者の集団」であることを意識させることが重要である。指導法を開発するにあたっては、例えば、それぞれの話し手が自分はどのような価値観を持っているか、ポジショナリティを自覚し、他者との対話によっていかに物事が異なって見えているかを意識することが考えられる。これは、権力関係をも含めた批判的思考へと生徒を導く契機にもなるだろう。

（５）「対話的」英語スピーチ活動の模索

今回の研究においては実証的な効果検証まで行うことができなかったが、以上の理論的枠組みや鍵概念を具体化させ、さまざまな「対話的」英語スピーチ活動を模索した。英語の授業で特に工夫した点として、以下の取り組みが挙げられる。

- 英語の思考法を意識させる（例：SV から始まる語順、行為主体としての主語を省略しないこと、結論から先に述べるディスコース）
- 英語の身体性を意識させる（例：腹式呼吸を意識した強い息、顔の部位の動きと呼吸との連動、節・等時性・強弱とリズム感）
- 目線の練習（例：体ごと相手に向ける、「目線ビーム」を一定時間相手に向ける、瞬きと目力）
- 敵対せず対等な関係を意識させる（例：挨拶で入りハイタッチで終わる、聞く側があえて相槌を打つ；ディベート形式であっても）
- 聴衆からの質問に答える形で話し手がスピーチをする形式（「話す聴衆」を意識）
- 小グループでローテーションすることで聴衆との距離を縮め、発話の機会を増やす形式
- 二つの相反する立場のグループが相互乗り入れし、議論する形式（ディベートというよりディスカッション）
- 記者会見形式（「話す（質問する）聴衆」を意識）

教育課程における授業のほかに、E.S.S.（英語研究部）のような課外活動における英語スピーチの取り組みは、日常的な英語学習とは異なり、非日常的な「祭り」の要素を仕掛けやすく、自主的かつ高度な英語スピーチ活動が可能である。

（６）今後の展望

今回の研究においては、試行した「対話的」英語スピーチ活動の効果検証まで至らなかったため、今後は具体的な評価のポイントを明確にし、学習者の変容を分析することが必要であろう。また、今回は理論的枠組みを参照しつつ指導法を考案したが、より理論的に指導法の有効性を意味づけしなければならない。現在明らかになった理論的枠組みと指導法は包括的な理解というよりも、依然として青写真に近く、今後より精密な理論的意味づけとそれにもとづく指導法の正当化が不可欠である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① 横溝　彰彦、英語スピーチ活動の聴衆分析における学生の同質性志向、全国高等専門学校英語教育学会研究論集、査読有、38 巻、2019、41-49

〔学会発表〕（計３件）

① 吉武　正樹、三熊　祥文、横溝　彰彦、コミュニケーション教育としての英語スピーチ活動―シティズンシップ教育の視点から―、日本コミュニケーション学会、2017
② 横溝　彰彦、話し手としてのポジショナリティを振り返る英語スピーチ活動、日本コミュニケーション学会九州支部、2017
③ 横溝　彰彦、英語スピーチ活動の聴衆分析から見える学生の同質性嗜好、全国高等専門学校英語教育学会 第 42 回研究大会、2018

６．研究組織

(1) 研究分担者
研究分担者氏名：三熊　祥文
ローマ字氏名：MIKUMA, Yoshifumi
所属研究機関名：広島工業大学
部局名：生命学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：10239212

(2) 研究分担者
研究分担者氏名：横溝　彰彦
ローマ字氏名：YOKOMIZO, Akihiko
所属研究機関名：久留米工業高等専門学校
部局名：一般科目（文科系）
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：00759962

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。